**平成２８年度授業づくり研修講座「論理的な文章を書く力を高める指導」**

講師　　中村　和弘　先生

受講者　土井　幸一　　　座間市立旭小学校

　夏の研修を受け、二学期に行った授業についてここに報告する。

思考力、判断力、表現力等、実生活で生きて働く力を育成することを目指し、様々な場面で「伝える」ことを意識した授業を行った。

　私の担任する学級はあさひ級２組という情緒障害を抱える児童が１年生から５年生まで合わせて８人が在籍しているクラスである。研修の中では毎日、作文の時間を設けることが勧められていたが、クラス児童の実態に合わせ、作文は一週間に一度。その代わりに毎日２回スピーチをする機会、毎回の授業の終わりには感想を共有する機会を設けるようにした。定期的に取り組むこと、時間や場所と誰に伝えるかを意識することで児童の伝える力は少しずつ向上していった。

児童の力が顕著に向上した例として児童Aを取り上げる。下の写真１・２は同じAが９月初めと１０月の中旬に書いたものである。Aは３年生で両親がフィリピン籍。家庭で日本語を話す機会も少ない。自閉症の診断を受けている。日常の会話も教員や友達の言葉をオウム返しのように繰り返しコミュニケーションをとっていることが多い。字の書きとりも苦手にしており、ひらがなやカタカナを書く時でも教員が横に付き添い見本を書く支援を行う必要がある状態だった。写真１は教員が支援を行い、横で話しかけ字の見本をみせつつ書いたものである。写真２では自発的に文章を書いており、本人の希望に沿い「BINGO」とアルファベットで書く支援を行った。児童自身が大きく成長している時期ということもあるが、短期間で伝える力と伝えたいという気持ちが大きく向上している。継続的に様々な場面で「伝える」ことを意識した授業を行うことの重要性を感じた。

思考力、判断力、表現力等、実生活で生きて働く力を育成するには一つの授業を変えるだけでは難しい。様々な場面で継続的に続けていくことが大切であると感じた。今回の実践で児童の力の向上を感じたが、まだまだ文法がおかしかったり、時系列が整理できない児童がいたりと課題も残っている。今後も児童が伝えたいという思いを持ち、その気持ちを表現する力をつけられるような授業を工夫していきたい。

写真２

写真１



